

ミナミトゲヘリカメムシの発生と薬剤の防除効果

ミナミトゲヘリカメムシの発生状況と、果樹カメムシ類に登録のある薬剤の効果を検証した。

■ ミナミトゲヘリカメムシの生態的特徴と発生状況

◆ 生態的特徴

- ✓ 体長は16～23mmの細長い大型のカメムシ。
- ✓ 寄主となる植物はシロモジ、クスノキなどのクスノキ科植物であり、それらを渡り歩いて生活する。
※雑木の近い園地で飛来が多い可能性がある。
- ✓ 南方系のカメムシでカンキツをはじめ、カキやスモモ、アボカドを吸汁することが報告されている。

◆ 発生状況

- ✓ R5年10月に本県で初めてカンキツへの被害を確認した。
- ✓ R8年は5月にカンキツで花の吸汁、7月上中旬頃にカキ、キウイフルーツ果実への加害を確認した。
- ✓ 本種は吸汁に適した樹種を渡り歩く。



■ 直接殺虫試験（令和8年5月16日～21日実施）

試験方法：所定の濃度に調整した各種薬剤に、本虫を5秒間浸漬し風乾。水と餌（アボカド）を入れた飼育容器に移動させ、処理6日後に生死を判定した。

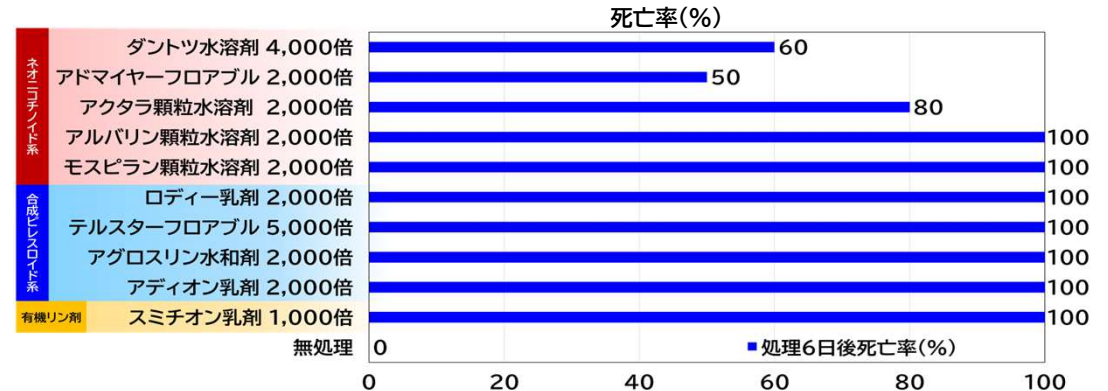


図1 各種薬剤の直接殺虫効果

■ 残効試験（令和8年5月16日～23日実施）

試験方法：所定の濃度に調整した各種薬剤に、シークワーサー果実を10秒間浸漬し風乾。飼育容器に果実を入れ処理6日後に本虫を4頭（1反復）、3頭（2反復）の計10頭（1区3反復）放虫した。放虫4日後に生死を判定し、同時に果実に残った口針数（対無処理比）を計数した。

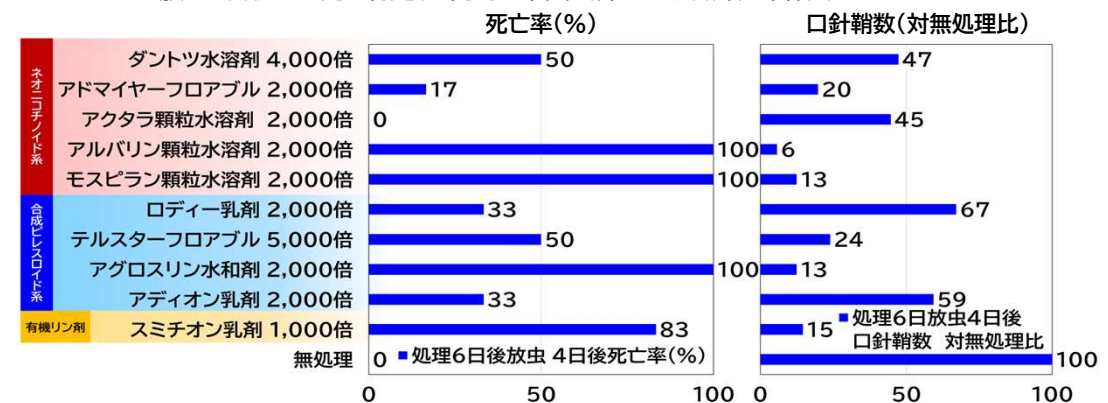


図2 各種薬剤の残効性

- ・ 直接殺虫試験では、ほとんどの薬剤で死亡率が高かったが、一部ネオニコチノイド系薬剤の死亡率が低かった。
- ・ 残効試験では処理6日後に放虫で、アルバリン、モスピラン、アグロスリン、スミチオンは殺虫効果、吸汁阻害効果ともに高く、本虫に対して高い残効性があると考えられる。
- ※ 本種は一般的な果樹カメムシと同様に、ネオニコチノイド系薬剤、合成ピレスロイド系薬剤の効果が高いが、それらの薬剤は連用するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖（リサーチエンス）を引き起こすため注意が必要である。